
安楽椅子に寝そべて

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安楽椅子に寝そべって

【Nコード】

N3549C

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

「美奈子ちゃんの憂鬱」番外編！桜井美奈子にはある秘めたる才能が……。彼女の回りで起きる有難くもない事件に、美奈子が挑む！……といっても、別にアクションも何もないんですけどね（苦笑）

温泉編 その1（前書き）

「温泉と狐とライバルと」翌日から物語は始まります。同作品をご覧になってからお読み下さい。でないと、混乱するかもしれませんので……多分。

温泉編 その1

「お姉ちゃん♪」

その声に起こされた時、私は自分が部屋の籐椅子に座っていることに気づいた。

庭の景色を眺めながら眠っていたらしい。

都会のコンクリートの景色ばかりに見慣れていたせいか、和風の庭の美しさを、どこかで忘れていた様な気がする。

「どうしたの？葉子」

嬉しそうな顔をする葉子の様子からして、二日酔いからは復活したようだ。

若いってうらやましい。

それにしても、どうも静かだと思ったら、葉子ったら、部屋から抜け出していたらしい。

「外に出る時は必ず被りなさい」と言い聞かせていた麦わら帽子を被ったままだ。

訝しがる私に、葉子は後ろに隠した手を出した。

「ほらっ♪」

手に乗るのは……なんだか茶色いシワのよったモノ。

何だかわからなかった。

「何？……これ」

指先で突いてみると、表面は固いけど、中は柔らかい。

「干し柿っていうんだよ？」

「干し柿？」

ああ。

思い出した。

柿を干したヤツね？

東京じゃ珍しいから、結構高いんだよね。これ。

「うん。おじちゃんにもらったの！甘くて美味しいよ？」

「へえ——って葉子！」

私は籐椅子の上で飛び跳ねた。

この娘ったら！

「誰にもらったの！？」

もし、葉子がどこかの部屋に入り込んでもらってきたとしたら、保護者として申し訳が立たないじゃない！

案の定、葉子は外に出ていた。

「黒い服着た人」……つまり、フロントの人に「遊んできます」といったから問題ない！とは葉子の主張だけど——その前に私に言いなさい！

……え？

私に断った？

そしたら……「いってらっしゃい」って、私、言ってた！？

……ごめんね？葉子。

次からはちゃんと起こして言ってね？

こほん。

話を戻す。

外で「探検ごっこ」の最中、私がヨダレ垂らして寝ているのを窓越しに眺めていた。

そしたら、隣の部屋のおじさんが葉子を呼んで、いろいろ遊んでくれた挙げ句、この干し柿をくれた。

で、葉子はお姉ちゃんの分も。といって、私の分までもらったのだ。

……やだ。

隣？

さっそくお礼にいかなくちゃ。

私はバッグの中を漁って、駅で買った好物の「ヒヨコ」の残りを
見つけた。

数は4つ。

少ないけど、お礼にはなるかな……折り詰めでも用意した方がい
いのかな？

だめ！

お金ないもんね。

……これで勘弁してもらおう。

葉子を連れた私は、隣の部屋、「紅葉の間」のドアを叩いた。
ノックを数回。

返事がない。

……留守かな。

困った。また来るか。

そう思っていたら、葉子が私の袖をひっぱった。

「お姉ちゃん」

葉子が指さす方、廊下の角を曲がってこっちへ歩いてくるのは、
頭が寂しいことになっている小柄なおじいさん。

好々爺という言葉がしっくり来るような割腹のいい、人当たりの
良さそうな笑顔を浮かべた人だ。

「おじちゃん！」

葉子が嬉しそうなおじいさんの元へ駆け寄っていく。

「おお。おお。さっきのお嬢ちゃんかい？」

「うん！」

「ほっほっほっ……干し柿は美味かったかい？」

「うんっ！ちゃんとお姉ちゃんにも渡したよ！？」

ちらり。と私の方に向けられた視線を受けて、私は慌ててお辞儀をした。

「ほお？ 礼儀正しい娘さんじゃ」

おじいさんは褒め言葉と一緒に、私に返礼してくれた。

「して？」

「あっ！はい！」

私は紙袋に入れたヒヨコをおじいさんに差し出した。

「あの、妹がお世話になりました！これ、少しですけど、お礼と思いまして」

「ほお？……これは済まないねえ」

おじいさんは嬉しそうに紙袋を受け取ってくれた。

よかった！

内心で安堵のため息をついた私に、おじいさんは言った。

「東京の人かい？」

「はい」

「私はここから少し離れた所に住んでいるんだよ……とはいえ、戦争中は知り合いのいる神奈川の方へ移住してね。ようやく戻ってきたというわけさ」

「ここへは、湯治に？」

「よくわかるねえ」

おじいさんは驚いたように言うけど、昼間に浴衣姿で風呂上がり
の風情を出すなんて、それ以外の何があるというんだろう。

「そう。歳とるとね？ どうもいかん。膝だの腰だの……私は毎年この季節になると、この温泉に湯治に来るのが楽しみでねえ」

「お一人ですか？」

「いや。神奈川の知人達も一緒だよ？」

おじいさんは部屋のドアをちらりと見た。

「今、部屋にいるはずだがな？……はて？」

「さつき、ドアをノックさせていただきましたが、誰もいらっしやいませんか？」

「おや？それはヘンだな」

おじいさんは小首を傾げて言った。

「私が湯に行くといった時、みんなはいたんだが……まあいい。もしよろしかったら、そちらのかわいい娘さんと一緒に夕食でもとらないかい？こっちは老人ばかりだ。若い子がいてくれるとうれしい、何より、にぎやかな方が楽しいだろう？」

「は？はあ……」

葉子とふたりじゃ、確かに味気ないかな？

そうは思っていただけに、このお誘いはありがたいけど……。

娘？

私——妹って言ったのに。

おじいさん、耳遠いのかなあ。

いくら何でも、私まだ16だよ？

4歳の娘がいるって……どういうこと？

このおじいさん、ボケてるようにも見えないけど、うん！きつと目が悪いんだな！

「じゃ、よかったらおいで」

おじいさんはそう言って、葉子の頭を撫でてから部屋のドアに鍵を差し込んだ。

長居はする必要ない。

そう判断した私は、手を振る葉子を連れて部屋に戻った。

それが、私の大失敗。

ううん。違う。

もしかしたら……私、この時、お礼なんて持っていかなければよかったのかもしれない。そうも思えてしまうのだ。

私は自分のとった行動全てが失敗だったと、今なら断言できる。

夕方。

少し早いけど、夕食前に葉子をお風呂に入れてあげた。

シャンプーハットなしで髪が洗えた！

そう得意げに喜ぶ葉子に相づちをうちながら、私は部屋で葉子の髪にドライヤーを当てる。

「お母さんにも自慢していい？」

シャンプーハットがとれたことがよっぽど嬉しいらしい。

「そうね。お母さんも喜んでくれるわよ？」

「本当に！？」目を輝かせる葉子があまりに可愛くて、私は頷いて答えた。

「ええ。絶対に。お夕飯食べたら、電話してあげようね？」

「うんっ！」

ふふっ。

この無邪気な所が葉子の可愛いところ。

この子が狐だろうが妖怪だろうが、天狐だろうが、九尾の狐だろうが、とにかく、なんだろうが、私は葉子が可愛くて仕方ない！

コンコン

葉子を抱きしめようと思った、丁度その時……。

誰かがドアをノックした。

先程のおじいさんかと思ったから、私はドアに近づいて開けた。

でも、外にいたのはおじいさんじゃなかった。

疲れたというか、憑かれたような顔に、いつそ燃やしてしまえと
いいたくなるようなよれたトレンチコート、それ以上によれよれの
背広を着た人が立っていた。

少し日本人離れた顔を少し傾げるようにしていると、何となく
愛嬌があって、ピーター・フォークを彷彿とさせる。

その人を前に、私は凍り付いた。

その人が、ある意味怖かった。

別にその人が私に拳銃を向けているとか、そういうことじゃない
(もしそうなら、葉子のご飯にしてあげるんだから！……お腹壊さ
ないか心配だけど)

「せっかくのご旅行中にすみませんねえ」

その言葉に、不思議に返事が出来ず、ただ頷くのがやっとだった。

何故？

その人が、ドアの隙間から私の顔の前に突きだしたモノが原因。

ううん。

この人が、それを持っていることが原因。

「警察です」

ソレ——警察手帳を初めて間近に見た私は、無言で頷くだけ。
ヘンに喉が渴く。

「ちょっとよろしいですか？」

「はっ、はい！」

私は慌ててドアのチェーンを解除して、ドアを開けた。

「どうぞ！」

「ああ。こりやすみませんねえ。お嬢さん」

警察手帳を胸元にしまってから、その人は言った。

「私、長野県警の刑事やってます竹村といいます」

「はあ……」

「実は、少しお伺いしたいことがあります」

「はい？」

高校生の私に警察が何の用？

その疑問がこの人にもわかるんだろう。

「いえいえ！」

刑事さんは大げさなまでに手を左右に振った。

「別にとって喰おうってわけじゃありません。ただ、ちょっと捜査にご協力いただければよろしいだけでして」

捜査？

まさか！？

私は青くなって、思わず後ろで不思議そうな顔をしている妹の顔を振り向いてしまった。

まさか……

まさか、昨晚の騒ぎのこと！？

誰かが警察に連絡していたとか！？

心のどこかで否定する疑問だけど、心配じゃないといえばウソになる。

「いえね？」

刑事さんはポケットからメモをとりだしたけど、書くモノがないらしい。

私は少し待ってもらって、バッグからえんぴつを取り出して刑事さんに渡してあげた。

「こりゃあすみません。……お嬢さん、東京の人ですってね」

「ええ。葉月市です」

「へええ……行ったことないですけどね。いえね？ウチのカミさんが東京生まれなもので、いろいろと話は聞くんですよ。あ、ウチのは練馬の出なんですけど」

「はあ……」

「ああ。いけないいけない。肝心なこと忘れてた」

刑事さんは頭を振ると、

「お嬢さん、ここ数時間、何してました？」

「え？」

何ソレ。

まるでそれって……。――。

「ああ。別に疑っているわけじゃないんですよ？」

刑事さんはそういうけど……。

「そのまんまじゃないんですか？」

……言っちゃった。

どうしよう。

思わず刑事さんの顔をうかがう。

面食らったという顔の刑事さん。目をぱちくりした後、吹き出したように言った。

「はああああ……いけませんねえ。商売柄とはいえ、そうなっちゃいますねえ」

「す、すみません！」

私は頭を下げた。

警察関係者なんてこの歳で（なくても！）、敵に回したいもんじやない！

「いえいえ」

よかった。刑事さん、怒ってない。

「ちよっとした事件がありましたね？それで宿の方にいろいろお話を聞きたいと思ひまして」

「事件？」

何だろう？

この宿、昨日まで日菜子殿下が泊まっていた宿だよ？
そんな所で事件？

……やな予感がする。

「ええ……ああ、気をしっかり持ってくださいよ？聞いてもあまり気分のいい話じゃないですから」

そう、断りを入れる刑事さんの顔を見ながら、私は頷いた。

……。

聞かなきゃ良かった。

もし、それで逃げられるなら、そうすればよかったんだ。

でも、私は聞いてしまった。

刑事さんは言った。

「先程ね？隣の部屋、紅葉の間っていうんですか？そこで老人が一人、殺されているのが見つかりまして」

温泉編 その2

「成る程？つまり」

刑事さんはメモを見ながら言った。

「あなたは、被害者と出会った。その目的は、妹さんが干し柿をもらったお礼」

「そうです。ただ」

私はお茶を出しながら断った。

「私はまだ、あのおじいさんの名前すら知りません」

「ああ。こりやどうも……それでは、被害者とは初対面と？」

「はい」

「被害者とはどういった話を？」

「ですから、干し柿のお礼について、お菓子をもらっていただいて、戦争中に神奈川に疎開していたこと、それから――あつ、神奈川の知人と湯治に来ていることを聞きました。あと……夕飯一緒にって」

「はい。わかりました」

「……ホントに？」

「ええ。あなたの言うとおり、現場には菓子の袋がありましたし、フロントにはあなた達の食事を自分達の会場へ移すように連絡が入っています」

「じゃ、それが……」

「そうです」

刑事さんはえんぴつを懷に収めながら頷いた。

「それが、我々の知る、被害者の最後の言葉です」

「えーっ？それは……」

そんな風に洩りながら、刑事さんは事件のあらましを教えてくれ

た。

被害者は、こうだ・たけし甲田武志72歳。

妻は戦争前に他界し、現在は独身。子供はいない。

元・S財団理事。現在は引退している。10年前に突然会社を後任に譲り、出身地だったここS市に戻って帰農。一年戦争中は現役時代のツテを頼って神奈川県T市に疎開していた。

この温泉も、元は甲田氏の持ち物で、観光復活のために氏が私財を投じて復活させたところ。氏の目の付け所は正しかったらしく、旅館は、湖畔の大きなホテルが復旧に手間取るのを後目に繁盛しているのは、誰の目にも明らかだ。

そして、氏自らが語っていた通り、氏来館の目的は湯治。

同行者は、氏が疎開していた際に世話になっていた人達——正しくは、氏の甥夫婦。

氏にとって唯一の血縁者だそうで、財団の幹部なんだそう。

他には甥の部下が3人、慰安旅行を兼ねて別室に宿を取っているという。

事件発覚のあらまはこうだ。

部下達の部屋に集まって、ビールを飲みながらポーカーに興じていたが、甥が所用のため、氏の部屋に戻った。

氏が部屋にいるはずなのにドアをノックしても返事がない。鍵はかかったまま。

フロントに問い合わせたら、氏は外出した様子はないという。

歳が歳だから、心配になった甥がフロントに頼んで鍵を開けてもらった所——。

「ナイフで背中を刺された氏が、倒れていたというわけです。途中

で抜けた甥以外の連中は、その時点までポーカーをしていたそうです。――あ、それとですね？ 鍵には細工痕がありましたから、密室のセンは考えなくて結構です」

刑事さんはお茶菓子を食べながら言った。

「そんな殺人事件、テレビや推理小説の中だけだと思ってましたけど……」

私はぬるくなったお茶で喉を湿らせながら言った。

「それで、犯人のメドは？」

「ははっ……ご期待下さいといいたいんですがねえ……」

刑事さんは申し訳なさそうに頭を掻いた。

どうも、自信がないらしい。

「……私や、推理小説の中に出てくる探偵や名警部ってわけでもないんですよ」

外見からそうだろうなあ。

ダメダメ。

そういう失礼なこと考えちゃ。

「例えば、一緒に来た人達は？」

「全員が全員と一緒にポーカー……私やルールなんてこれっぽっちもわかんないんですけどね。それをしていたと口をそろえています」

「その部屋でポーカーを？」

「ええ。カードだけでやっていたそうですけど」

ふうん？

チップ、使わなかったんだ。

なら、紙にでも勝敗をまとめていたのかなあ。

私は思いつくままに事件の原因を言ってみた。

「物取り」

「不審者を見たという証言は何も」

「……怨恨の線」

「ありえないとみんな口をそろえています」

「遺産目当て」

「資産はそこそこありますけどねえ。他はこの旅館と、この先にある山と農地くらいですねえ。旅館はともかく、地価で考えれば二束三文だ」

「……」

成る程。

刑事さんでもなくても、これはわかんない。

犯人も、目的も、何もわかんない。

私だって、推理クイズで出されたら根を上げちゃうかも。

「うーん」

「うーん」

私と刑事さんが互いに腕組みしながら考え込んでいる所へ

「お姉ちゃん！」

葉子がドアを開けて飛び込んで来るなり、私に抱きついてきた。

「こ、これっ！」

じゃれる葉子をあやしながら、私はちらりと刑事さんの顔を見た。

元気すぎる葉子に一瞬驚いた顔をした刑事さんは、すぐに優しくそ

うな顔に戻ってくれたと思ったら……。

うわっ!?

刑事さんの顔が厳しい！

「お嬢ちゃん？」

声は優しいけど、顔が怖い！

「それ……」

刑事さんの指さした先。

それは葉子の手。

何かを掴んでいる。

ビニール袋に入ってる……何？

トランプ？

私のじゃない。

水瀬君から巻き上げた私の愛用品は、18世紀英国アンティークの逸品。

葉子相手に使うのはポケモンのだけど。

そのどっちでもない。

「お嬢ちゃん」

「葉子だよ？」

葉子は刑事に初めて気づいたんだろう。そう言った。

「……葉子ちゃん。そのトランプ、どこにあったの？」

「別のお部屋」

「これっ！」私が葉子の手からトランプをもぎとった次の瞬間――

トランプを入れていたビニールの口を止めていたセロテープが外れ、トランプが畳の上にまき散らかされた。

うわっ！

しまった！

「す、すみませんっ！」

私は慌ててカードをかき集める。

「ははっ――それが、甥達が使っていたカードですよ」

「すみませんすみませんっ！」

現場にあった重要な品。

それを黙って持ってきて、あまつさえ床に散乱させたなんて、証
拠隠滅と疑われてもしかたない！

私は半泣きになりながらカードを一つに集めようとした。

「いや——重要な品ではないので」

「でも！」

私は言った。

「きちんと数えてお返します！葉子？」

何だかわかんないけど、悪いことをしたらしい。

そんな顔をしている葉子に、私は訊ねた。

「持ってくる時、落とさなかった？」

「う……うん」

ババヌキ……小さい声でそう言う葉子に、私は言った。

「後でしてあげるから。それまで待ってて」

「うん」

とにかく、カードを集めて……枚数を確認して……。

えっと……一枚、二枚……。

……。

……。

……

あれっ？

うそ。

私はカードを数え直した。

……。

……。

えっ！？

もう一度！

……。

……。

……マズい。

「桜井さん？」

刑事さんが声をかけてくるけど、今の私にはそれに構っていられる余裕はない！

どうしよう！

そうとしか考えられなかったから。

「どうしたんです？」

刑事さんが腰を上げた時、私は床に這い蹲っていた。

「カード！」

ない！

ない！

うそっ！？

「ないんです！一枚！」

「……———どういふことか、わかる？」

旅館近くの神社。

その広い石畳の参道を歩くのは、私と葉子、そして水瀬君だ。

さすが古刹。

大きな杉の木が両脇にデンと鎮座する参道は荘厳な空気すら醸し

出している。

ちよつとだけ、葉子が心配だけど、元気だし、水瀬君も何もいわないから大丈夫だろう。

「それだけで？」

水瀬君は困った顔をするけど、私はただ頷いてあげた。

「えっと」

うーん。

水瀬君は腕組みしながら考え込んでいるけど……。

無理だろうなあ。

これでわかるとしたら、多分、未亜だけだ。

「わかんない」

としか言い様がないもんね。

許してあげよう。

石畳の参道を経て、社殿の前まで来た所で、水瀬君はじれたように言った。

「それでどうして、犯人が甥達だってわかったの？」

「知りたい？」

「うん！」

「簡単なのよ」

私はポケットから愛用のカードを取り出した。

「あのね？ 無くなっていたのは、ポーカーで最強のスペードのエース。ジョーカーなしでババヌキしているようなもの……といえば言い過ぎかな。でも、最強の手を欠いたまままで何時間もポーカーしてるなんて考えられないでしょう？」

「それだけ？」

水瀬君はすぐ疑わしい。という顔だ。

「だって、そのカードなしでも出来るんでしょう？ ポーカー」

「ええ……でも、やりこんでいる人達にとっては耐えられる代物じゃないわ」

「やりこんでいる？」

「カードのへたり具合からみても、かなり熱中していたみたいよ？
そもそもの事件のきっかけも、ポーカーのお金の貸し借りが積み
積もった結果みたいなものだし」

事件の結末だけはつきりしておこう。

密室殺人の犯人は、甥達、旅行の同行者全員。

私が刑事さんに一芝居うってもらった結果、判明したことだ。

芝居？

ポーカーをやっていた全員を前に刑事さんに言ってもらうだけ。

まずは確認だ。

1. 連続してゲームを続けていたのか？
2. 何か賭けていましたか？

この確認は必須。

ポーカーは一回だけじゃなくて連続して行う性格のゲーム。

当然、そこには勝敗が発生する。

賭け事につき物なのはお金。とは言わなくても（お金を賭けたら
犯罪だもん）、チップを賭けていたとか答えるはずだ。

ここまで確認した上で、

「カードが1枚足りません。これでどうやってポーカーを続けていたか見せていただだけませんか」

……犯人達は、意地でもポーカーをやり続けるだろうから、

「事件の頃までの勝敗の記録するものを見せてください。ない？ ほう？ 連続していたんでしょう？ 賭けてまで。それでどうやって勝敗をまとめていたんですか？」

記録は捨てた。というだろうから、

「どこにです？ あなた方は今の時点まで、この部屋と隣の部屋しか出入りしてないんですよね？ どこに捨てたんです？」

効果はてきめんだった。

どうということ？

つまり、甥達はポーカーをしていなかった。

当然だ。

あんなカードでポーカーなんて出来るもんか。

しているフリをして、氏を殺す手はずを整えていたんだ。

氏が私達の前で鍵を開けたのも、氏の油断を誘うための手段。

それを知らない氏は、何も警戒することもなく、部屋に入り、隠れていた甥により刺され……。

カードがわかんない刑事さんは半信半疑だったけど、ここまで問いつめられた途端に、全員が顔色を変えてしまったことで、彼らは刑事さん達から逃げる術を自ら失った。

まず、甥が自白した。

目的は、甥が勝手にかけた生命保険。

動機はギャンブルで作った借金の返済。

甥と同行した全員が借金潰けだったと聞かされた時はさすがに驚いたな。

私は奉納された絵馬が連なる所（なんて言うの？）の前で立ち止まった。

いろんな絵馬が奉納されている。

「祈願 国家鎮護 万民富楽」

女の子の字でそう書かれた絵馬があった。

お堅いこと書くなあ。と感心した矢先、その絵馬の端っこにこう書かれていたのが目に止まった。

「おっぱいが大きくなりますように」

本当に、小さくそう書かれていた。

「無理。諦めなさい」

何故そう思ったかはわかんない。

でも、それが最も正しい感想だと思えてならなかった。
誰が書いたのかもわかんないのに……。

うん。不思議だ。

「でも……おかしいよ」

一緒に絵馬を見ていた水瀬君が首を傾げた。

「貧乳は貧乳で、まずは現実を受け入れなくちゃ」

「え？ いやあの、そういうことじゃなくて……っていうか、誰のこと？」

あっ。こっちのこと！

こほん。

「そんな人達が、どうして最強のカードをなくしたか——でしよう？」

「そ……そう」

不承不承という顔で頷く水瀬君。

「あのおじいさんの仕業よ」

「被害者が？」

「そう。あの人、ポーカーがどうしてもわかんなかったんだって。だから仲間に入れない。それが面白くなかったみたいね。スペードのエースが最強のカードと知ったおじいさん、それさえなければ、ポーカーはなくなるとでも考えたんじゃない？ 金庫に入っていた日記にカードが挟まっていた」

「金庫にねえ……」

「わりきれないみたいだね。まだわかんないことあるの？ 犯人は逮捕されるんだよ？」

そう。

犯人が自白したんだ。

もう、事件は終わりなのに。

水瀬君は何が知りたいんだろう。

その水瀬君は言った。

「その……ポーカーについて」

神社の端にある休憩室で、私と水瀬君はポーカー。と思ったけど、水瀬君はルール知らないし、葉子が「つまんない！」とグズりだすしで、自分お預け。

仕方ないから仲良くババヌキ。

……まあ、いいでしょう。

意外と強いのが葉子だ。

この子、不思議とババ（ジョーカー）を避けることについては天才的。

「さーてどっちかなあ」

なんて誘っても、この子はのったフリだけして絶対にババに手を回さない。

反対に、水瀬君と来たら……。

「あーっ！」とか、「えっ!？」とか……自分で「ここにババがありますよ!」って言ってるようなもんだってどうしてわかんないんだろう。

ポーカーやる時は、ガスマスクでも被らないと、とてもじゃないけど勝てないよ？水瀬君。

「はい！一番！」

私がそう言えたのは何度目の時だったろう。
連敗記録更新中の水瀬君、熱くなっちゃって止めようとしな
い。葉子もおもしろがって止めようとしな
いし、……そろそろ帰らな
いと、お昼ご飯、食べられなくなっ
ちゃうんだけど。

とにかく、一番最初に上がった私は二人のやりとりをみつめていた。

ババは葉子の所。

手持ちはそれぞれ2枚ずつ。

「お兄ちゃん」

葉子がカードを出しながら言った。

「私が勝てたら、ご褒美くれる？」

「いいよ？」

じつ。とカードを見る水瀬君はそう答えた。

「じゃ、私が勝てたら」

次の瞬間、葉子の口から出た言葉。

——えっ？

私はそれに凍り付いた。

オネエチャンヲ、オヨメサンニシテ。

そう……聞こえた気がした。

それだけじゃない。

イイヨ。

水瀬君の口から出た言葉は、そう聞こえた。

「うん！じゃ、はい！」

葉子が嬉しそうに水瀬君を促す。

ち、ちょっと待って！

カード、しかもババヌキで人の人生決めないで！

じーっ。と2枚のカードを見つめた水瀬君は、素早い動きで一枚のカードを抜いた。

「これっ！」

「やったあ！」

葉子が飛び跳ねて叫んだ。

「勝ったあ！！」

ピョンピョン跳びはねてうれしさを表現する葉子は私の手をとって踊り出さんばかりの勢いだ。

「やったよ！？お姉ちゃん、勝ったよ！」

「そ……そうね。おめでとう。葉子」

「うんっ！」

満面の笑みを浮かべた葉子が、真っ白になって崩れた水瀬君に言った。

「お兄ちゃん！約束だからね！？」

「――へっ？」

水瀬君、現実には足がついていない。

そりゃあ、4歳児に高校生が負けたなんて、ショック以外の何ものでもないでしょうけど……。

でもね？

葉子も葉子よ。

お姉ちゃんの人生、なんだと思ってるの？
よりにもよって――

「お姉ちゃんと結婚してくれるんだよね！？」

こんなこと、水瀬君に言うなんて！！

は、恥ずかしいにもほどがある！

「じゃ、記念ね！？」

なんと、葉子ったら何したんだろう。

私の後ろへ回ったと思ったら、水瀬君めがけて力一杯私を突き飛ばした。

「きゃっ！？」

さすが妖狐！

いざという時の力は人間業とは思えない！

私はそのまま水瀬君に抱き留められる形になった。

つまり……水瀬君の胸の中に顔を埋めて……。

水瀬君の香りを一杯に吸い込めるのは確かに、う、嬉しいけどさ？

顔から火が出そうなほど恥ずかしい！！

「ねねっ！？お姉ちゃん！チューツして！？」

葉子が目を輝かせておねだりしてくるけど、そんなこと出来るわけないでしょう！？

「えーっ！？なんでえ？」

何でじゃなくて！

「ふーふになったらチューするんでしょう？」

「なっ……なっ！」

やだ！

顔が赤くなってるのわかる！

「お、お母さん達してないでしょう！？」

「寝る前いつもしてるモン！」

「いくつのつもりよ！あの夫婦は！」

「お姉ちゃん！」

あーっ！

もうっ！

こんなことなら、殺人事件にでも関わっていた方がマシだよおっ
！！

温泉編 その2（後書き）

犯人は一度も出ない。現場にも行かない。それでも犯人を知ることが出来る探偵を「安楽椅子探偵」と呼ぶそうです。

それにしても……もう少し、ひねるべきだったかな？
反省です。

鈴紀編（前書き）

今まで書いたこと無いほど長くなりました。ご注意ください。

鈴紀編

●桜井美奈子の日記より

放課後、部室に残って未亜の原稿の校正を手伝う。

この子、情報収集能力はスゴイけど、それを整理したりまとめた
りする能力はからっきし、ない。

調べることは調べるけど、興味が満たされれば、頭の中に情報を
収納だけして、後はどうでもいいって感じ。

ようするに、やったらやりっぱなし。

感心は出来ないけど、こういうのは人間そう簡単に直るもんじゃ
ないし。

「にゃあ……ごめんねえ」

真っ赤っかになっていく原稿を前に未亜が申し訳ないって顔をし
た。

「そう思うなら、もっと原稿精査しなさい」

「してるよお……」

「してるつもりになってるだけ——この原稿がいい証拠。よし。
出来た」

A4のレポート用紙は、気がついたらもう書き込む余地がない程
真っ赤になっていた。

「えーっ！？こんなに書き足しするの！？」

「仕方ないでしょう？」

悲鳴を上げた未亜に、私は赤ペンのキャップを戻しながら言った。

「こんなタイトルで仕事するんなら、覚悟してやらなくちゃ」

「えーっ！？私、ヤクザ調べているんじゃないよお？」

「原稿書いていて、それ以上だっと思わなかったの？」

「西園寺部長に一泡吹かせてやりたいだけだよお」

「それにしても」

私はほおづえをつきながら、原稿を見た。

「よりによって……この人のことは……ねえ」

報道部にもタブーはある。

ゴシップや本人の承諾を得ていない特定の個人を狙った報道というのが一般的。

つまり、個人情報やプライバシーの侵害に該当する報道は出来ない。

これは、部員の個人的なイジメ行為等を防止するためというのが建前で、本音は裁判沙汰を避けるための措置。

他に、部員達の間でも意外と知られていないのが、学内で危険人物と指定されている特定の個人・団体に関する報道。これだ。

未亜のレポートは、これに抵触しまくっていた。

「あんた、これは部長に出したら大事だよ？」

「なんで？」きよんとする未亜。

「なんでって——」あきれかえる私。

「あんた、誰を調べたか私に言ってご覧なさい」

「だから——2年A組羽山鈴紀」
はやま・すすき

「それが問題なんだってば！」

はやま・すすき
羽山鈴紀

普通科コース2年A組在学中。

探偵同好会会長兼生徒会書記長。

頭脳明晰・運動神経抜群、しつとりと濡れた若葉を連想させる美貌。

写真だけ見ると、非の打ち所のない完璧人間なんだけど——。

彼女については、定評がある。

私が問題にしているのはこれだ。

それを未亜の調べたレポートからいくつかを抜粋してみよう。

担任のコメント。

「え？成績はいいですよ？成績は——え？他？勘弁してください。ぼ、僕にも家族が」

友人代表のコメント。

「あの子、絶対人間じゃない！悪魔よ！悪魔！」（収録中、背後のクラスメート達による「もっと言ってやって！」コール鳴り響く）

某自由業構成員のお方のコメント。

「あのアマあ……洗濯屋だなんてウソこいて組の金ガメやがって……俺あ、あんな悪党見たコトねえ」

わかるでしょう？

はつきりいって普通じゃない。

ここまで言われるなんて悪徳政治屋でもそうはいない。

外見はものすごい美人なのに、にこりと微笑まれるだけで教師達が縮み上がる厄介者。

それが羽山鈴紀だ。

ちなみに、羽山という姓からわかると思うけど、あの羽山君の従姉。

とはいえ、羽山君は「鈴紀」という名前を聞くだけで拒絶反応を引き起こすほど嫌っているし、それで普通だと言い切っている。

「おい桜井！」

先輩が部室の入り口から声をかけてきたので返事をした。

「はい？」

「デートのお申し込みだぜ？」

「はい？」

先輩達の冷やかしを聞き流して入り口を見たら、そこにいたのは水瀬君だった。

先輩達に追い出されるように部室を後にした私達は、今年の春新設されたカフェテリアに移動した。

「お、お願いがあつて」

「その前に」

一体、水瀬君に何があつたんだろう。

水瀬君の頭には大きなタンコブ。

「一体、誰の仕業？」

「それが……」

「私ですわ？」

突然かけられた声に振り返ると、女子生徒が一人、立っていた。清楚な深窓の令嬢という言葉がぴったり来るあたり、なんだかルシフェルさんを想像させる。

リボンの色から2年生で、しかもその顔から相手が誰かはすぐわかった。

羽山鈴紀先輩だ。

写真で見るよりずっとキレイな人だけど……。

でも――

「あのお……」

私は聞かずにはいられなかった。

「何です？」

「背後のバラは……なんですか？」

そう。

なぜか

鈴紀先輩の後ろには大量のバラが飾られている。

「あらイヤだ」

先輩、ちょっと驚いた。という仕草を見ると、水瀬君の胸ぐらを掴み上げた。

「水瀬君？ 私のイメージは白百合だと——何度も！」

「ごめんなさいごめんなさいっ！」

水瀬君、完全に怯えている。

「白百合って高くて僕のお小遣いじゃ」

「私への忠誠心があるなら、サラ金にでも走るのが当然じゃありませんこと？」

うわっ。さらっと凄まじいこと口にしてるし。

「あ、あのお……」

このままだと、水瀬君がとんでもない目に会いそうだったから、助け船を出してあげた。

「それで、何のご用ですか？」

「あら♪」

ぱっと水瀬君の胸ぐらを離した———というか、水瀬君を突き飛ばした先輩は、嫣然と微笑んだ。

「いろいろお噂は聞いていますよ？ 桜井美奈子さん？」

「はあ」

噂？

何だか嫌な予感がする。

そう思う私に、先輩は告げた。

「探偵部へ来ませんか？」

逃げようと思ったけど、逃げようとするだけムダだと悟った私は、先輩に連れられて部室に向かった。

「あれ？ 探偵同好会じゃなかったんですか？」

「今年の春から昇格です」

探偵同好会は推理小説ファンの集まりで、私も時々顔を出す、とても和気藹々としたいい同好会だ。

図書館の手伝いもするし、文芸部とも交流が活発な先生達のウケもいい優良同好会。

それなのに……そこに先輩がいたの？

「同好会には二種類あります」

先輩は歩きながら説明してくれた。

「推理小説好きが集まる読書班、探偵としての行動を求める行動班

——私は後者を束ねています」

「それって——」

私は思わず立ち止まった。

「それって……“明光のゲシュタポ”」

「口さがない愚か者の呼び方ですわ」

先輩は意にもとめない口振りだけど、それはそれは厄介な組織なのだ。

表向きは風紀委員会の協力機関。

ところが、実質は風紀委員会の上位機関。

別名…影の明光学園理事会。

明光学園内外にネットワークを張り巡らし、ターゲットに指定されれば、よくて退学、最悪自殺まで追い込む組織。

盗聴盗撮当たり前。誘拐拷問洗脳何でもござれ。

マスコミだろうが警察だろうが、全てを敵に回して五分以上に渡り合えるという、情報戦のスペシャリストの集まりとも聞いている。

「そ……そんな組織の方が、なんで私を」

「ご協力いただきたいからです」

部室棟の端、探偵同好会の部室。

そのさらに奥。

豪華な彫刻の施されたブロンズ製の扉。

地獄の門をあしらったデザインがとても印象的だ。

「“これ”のレプリカは日本に3つだけです」

先輩はドアの鍵を開けながら言った。

「華雅女子学園生徒会風紀委員会室、皇室近衛騎士団正門、そしてここ」

「上野の……」

「あれこそレプリカのレプリカですわ」

門をくぐって、部室を案内された。

中は教室のようになっていて、生徒が何人か座っている。

ただ、座っている席より空いている席の方が圧倒的に多い。

「随分、空いていますね」

「ええ」

先輩は、何でもないという顔で言った。

「えっと……『悪魔のバット事件』で太田、『調理同好会連続殺人事件』で佐々木と河合と榎本、『アイドル連続誘拐事件』で江藤、『保健室連続失踪事件』で伊東、龍田、川村、辻……みんな殺されちゃいましたから。アハハハハッ」

「はははっ……って笑い事じゃないでしょう!？」

私は思わず怒鳴った。

「どこの世界にそんな死人の出る学校があるんですか!」

「問題はそこです」

先輩、突然真面目な顔になった。

「今までの事件——すべて同一犯人の仕業なのです」

「——はい？」

「とりあえず」

ぺらっ。

先輩がポケットから取り出したのは数枚の写真。

それは——

「なっ!？」

顔から火が出るほど恥ずかしかった!

全裸で写真に写っているのは――

「これ、どうなさいます？」

「な、なななななっ！」

慌てて先輩の手から写真をもぎ取ろうとする私を避けながら、先輩は勝ち誇ったように言った。

「焼き増しして校舎の屋上からばらまくというのも手ですわねえ」

「や、やめてくださいっ！」

そう。

いつ撮ったかは知らないけど、映し出されているのは私の全裸写真。

「み、未亜の仕業ね!？」

「未亜ちゃんなら、写真は独り占めですわ? これは私が独自に」

「何をしてるんですか! 何を!」

「趣味です♪」

ニコリと微笑む先輩、それだけなら美人なんだけど……。

「念のための意思確認です」

「ですから返してくださいっ!」

「次の質問に、“はい”か“イエス”で答えてください。犯人退治に協力してくれますか？」

「選択の余地がないです!」

「じゃ、協力してくださいね? 犯人退治♪」

「なんでそうなるの!？」

「で？」

翌日は土曜日。

学校は休みなのに――

「何で俺まで駆り出されるんだ?」

葉月駅前のロータリーで、不機嫌そうに言うのは羽山君だ。

「まあ、そう言わない」

「親戚なんでしょう? そう無碍にすることも」

「あれの血が混じっていることを、俺は呪っているよ」

口ではそう言いながらも、葉子と遊んでくれる羽山君。きつといいお父さんになるよ。

「水瀬達は？」

「調べたいことがあるからって、先に行ってる」

「へえ？」

キッツ

ロータリーの前に止まったのは一台の4人乗りオープンカー。

「ジャガーX150オープンコンバーチブルかあ」

羽山君は感心したように言ったけど、その顔は即座に凍り付いた。

「お待ちせよ」

運転席に座るのは、白いワンピースにサングラス姿の鈴紀先輩だと知ったから。

うわっ。

こうして見るとすごいなあ。先輩って。

モデルみたいでみんなの注目の的。

みんな見とれてるよ！

「光信も来てくれたんだ」

「ダチを強請ったらしいな」

「お願いしただけよ？」

「お前の言うお願いは一般社会じゃ恐喝と書くんだよ——トランク開ける」

羽山君、私達の荷物を手早くトランクに押し込むと、葉子を抱きかかえた。

「葉子ちゃん後ろでいいか？」

「まあ！」

鈴紀先輩が驚いた声を上げた。

「光信ったら、いつの間にペドに！」

「はあ？」

「そんな小さい子を相手に後ろでするなんて！」

「後ろの席だ後ろの席っ！」

「わかってますよ」

鈴紀先輩がぼつりと呟いたのを聞き逃さなかった。

「光信ってホント単純」

車に揺られること数時間。

オープンカーって思ったより風がなくて気持ちいい。

「で？」

助手席に座った羽山君が言った。

「お前が温泉とはどういう魂胆だ？」

「何も聞いていないの？」

「桜井だって駅前に10時としか聞いていないそうじゃねえか」

「私が言い忘れた。そう言いたいなの？」

「言う必要がなかったとか、そういう負け惜しみじゃねえだろうな」

「……」

鈴紀先輩は、どこからか一通の封筒を羽山君に渡した。

「探偵部に送られた挑戦状」

「はあ？」

羽山君は封筒の中身を改めると、無言で私に渡した。

「連休の一時をお楽しみいただこうと別荘と心づくしの料理をご用意いたしました。そしてとっておきのアトラクションをお楽しみ下さい——怪人虹男？」

「そう」

「先輩、そんな知り合いがいるんですか？」

「知り合いといえば知り合いね」

鈴紀先輩、何でも無いって顔だ。

「同好会に入会する前に何度か」

「いつ頃です？」

「最初が——小学校入学式の時だから」

「はあっ!？」

「入学式に現れたアイツめがけて、25口径撃ち込んでやったの。それ以来」

「小学生が入学式になんで拳銃なんて！」

「ランドセルの中には短機関銃だって入っていましたわ？」

無然とする鈴紀先輩。

たまらず横を見たら、イヤなことでも思い出したんだろう、羽山君が遠い目をしていた。

「それ以来って……鈴紀先輩に対する個人的怨念とか」

「まあともかく」

それ以上聞きたくないんだろう。羽山君が言った。

「鈴紀、こんなバカじみた話にのるってことは……何かかぎつけたのか？」

「ううん？」

鈴紀先輩はハンドルをきりながらあっさりと、

「無料^{タダ}だから」

「お、お前……」

「だって！海辺の別荘に美味しい料理！全部タダなんですよ！？」

鈴紀先輩、恍惚とした顔になる。

「ああ……♪おいしいお料理の待つ豪華な別荘。そこにオープンカーで乗り付けるわ・た・し♪」

「っーか鈴紀！」

羽山君、何故か青くなっている。

「お前17だろ！？免許どうした免許！」

「？」

怪訝そうな顔の鈴紀先輩、すぐに言い返した。

「私は、少女探偵ですよ？」

「はあ？」

「無免許運転なんて当然ですわ？」

降ろせえええっ！

止めてえええっ！

海辺の眺めを楽しむ余裕は、もう私達にはなかった。

へろへろになった私達を出迎えてくれたのは、水瀬君達。

水瀬君と博雅君にルシフェルさん。そして涼子さんがいた。

電車とバスを乗り継いでここまで来たという。

途中で食べた海鮮丼がとってもおいしかったそうで……。

私、絶対、そっちにしたかった。

別荘とはいけど、正確には別荘風の旅館。

別荘風の建物をいくつかつないでいるだけだ。

15時丁度にチェックイン。

それぞれに割り当てられた部屋に入る。

利用客は建物を自由に使えるし、食事やお風呂もそこでとれるなんて、最近の旅館は手が込んでいるなあ。

私は葉子と一緒に部屋に入ると、すぐに荷物を置いて旅館の中を探検。

「やっぱり温泉よねえ！」

豪華露天岩風呂にジャグジーまであるのを見つけて感動。

S市の旅館もよかったけど、こういうのも捨てがたい。

その後合流したルシフェルさんから葉子が離れないので、一緒に見取り図を見ていたら――。

「あれっ？」

見慣れた人がいた。

まさかこんな所で会うなんて予想もしてなかった人。

向こうも相当びっくりしていた。

「り、理沙さん？」

「み、美奈子ちゃんにルシフェルちゃん？」

「葉子もいるよ!？」

「あ……ああ、ひ、久しぶりね」

すでに浴衣姿の理沙さん、何だかかなり慌てている。

「お休みですか？」

「え!?! ええ! そ、そう! 今日はオフで! オフで一人っきりで! あはははっ!」

笑う理沙さん。

かなりアヤシイ。

「岩田警部は？」

「今お風呂に――」

……成る程?

そういうことですか。

夕食はみんなが集まって。

豪華海鮮メニューだという。

船盛りなんて何年ぶりだろう!

「でさあ」

羽山君が楽しげに言った。

「これでメシに一服盛られていたらギャグだな」

「大丈夫です」

鈴紀先輩がそれを否定する。

「料理は、私の知り合いに頼みましたから」

「知り合い？」

「料理がシュミの方です」

「職業は？」

「検屍医ですわ」

しん。

みんなが静まりかえった。

その人が出てきたから。

料理人の格好でもしてくれればいい。

それなのに、何故手術室で着るような格好をしているの!?

「……お待たせしました」

ゴム手袋で持ってきたのは魚の活け造り。

「死因は失血性ショックです」

確かに検屍医だわ。この人……。

「……メニューを言え、メニューを」

羽山君、それは正しい意見です。

「死後2日から3日……」

「喰えねえだろ! 鈴紀っ!」

一人だけ平然と刺身をパクついている鈴紀先輩に羽山君が噛みついた。

「これは俺達に対する嫌がらせか!？」

「まさか」

鈴紀先輩、羽山君のお猪口にお酒を注ぎながら言った。

「執刀に関しては日本一の名医、ついでに魚捌き全国コンクール連続10年優勝のベテランよ? 執刀ない日は魚屋と肉屋で働いてるんだから」

「……」

「と、とにかく喰うか」

「光信。お酌してあげる」

そう言えば、涼子さんも平気そうだけど?

「コレくらいでメゲてたら看護婦なんて出来るもんですか♪」

そういうものなんですわ……。

「待つて」

そう言っ羽山君を止めたのは水瀬君。

「……」

無言でお猪口を改める。その顔は真剣だ。

「アルカロイド系」

ぽつりとそう呟いた。

「象だつて一発で死ぬ程強力なヤツが入っている」

「……心理的盲点でしたね」

鈴紀先輩。

そういいながらパクパク食べるの止めようよ……。

「とにかく、飲み物には注意して。鈴紀先輩が毒味してくれた刺身は問題ないけど」

「お待たせ」

検屍医がまた何か持ってきた。

「これなら大丈夫です」

出されたのはどうやら牛刺。

「死因は脳挫傷。死後3〜4日の筋肉断片です」

「だから死体を強調するんじゃないやねえよ……」

「他にも」

今度は海老の活け作り。

「外傷性ショックが見えます」

確かに……海老がビクビクしてるけどさ。

「他、頼んだから」

いつの間にかインターフォンに向かっていたルシフェルさんが言った。

「熱いかもしれないけど、お鍋なら問題ないでしょう？」

結局、汗かきながらお鍋をつついて夕食は終わり。

部屋に戻ったけど――――

あれっ？

私は部屋に入るのを止めた。

何かおかしい。

ん？

誰かが侵入したのは明らかだ。

また、マルかな？

私は部屋に置かれた葉子のぬいぐるみを見て、そう思った。

気にしなかったんだ。

その後、汗を流すためにお風呂へ。
みんなが集合。

いろいろあったけど、お風呂は最高♪
葉子、ちゃんと肩までつかりなさい。

「ふふっ。可愛い子ですね」

「先輩、子供好きですか？」

「ええ♪身代金とか臓器売買とか」

●男湯

「まったく冗談じゃねえ」

男湯で湯船につかる羽山がぼやいた。

「鈴紀のヤツ、何が怪人虹男だ」

「本気じゃないだろう？いくらなんでも」

「ううん？」

水瀬が言った。

「アレ、本当にいるよ？」

「はあっ！？」

「何だか知らないけど、探偵部を目の敵にしているのは確か」

「殺人犯が実在する？」

「探偵部で死人が出ているのは事実だもん」

「そういえば、お前、なんで鈴紀に従っているんだ？」

「四方堂先輩から頼まれたんだよ。探偵部で起きている連続殺人事件、鈴紀先輩に手を貸してくれって」

「生徒会長から？」

「会長も心配しているんだよ。殺された連中、学校でも鼻つまみっというか、情報をネタに恐喝や強請やって、警察が立件する一步手前まで行ってた連中だから」

「鈴紀が粛正したわけじゃあるまいな」

「僕もそれ考えたけど」

水瀬は首を横に振った。

「アリバイが崩せないんだよ。先輩と犯行時間がつながらない」

「誰か共犯者がいて」

博雅が考えを述べる。

「先輩はソイツに任せた」

「お金のね？」

水瀬はそれさえ否定する。

「お金の出入りがそれだと説明できないんだよ。先輩は、お金の入りが出を圧倒しているし、ここン所、最高10万円以上の出がない」

「細かく引き出したとは？」

「ありえないって結論づけた。先輩みたいな守銭奴、そんな手数料かかるマネする位なら死を選ぶよ」

「よく知ってるな」

「守銭奴には知り合いが多くて……」
はあっ。

水瀬は天井を見上げた。

壁越しには女風呂からキャアキャアと楽しげな声が聞こえてくる。

「こんな楽しいのに……」

「厄介事にならなきゃいいが……」

水瀬達全員が同時にため息ついた時だ。

「へーっ！ そうなんだあ！」

女風呂から葉子の声がした。

「じゃあ！」

不思議とよく通る葉子の声は、男風呂にいる全員が耳にしていることだろう。

「みんなおマタがオトナなんだね！」

「……」

「……」

「……」

「どうやったらオトナになるの！？」

「……」

「……」

「……」

男湯が謎の沈黙に包まれた。

●桜井美奈子の日記より

たまらず私達は逃げるように女湯を後にした。

葉子に悪気があったわけじゃない。

でも、あの瞬間の男湯の沈黙が痛すぎる！

部屋に戻って葉子の髪を整えて寝かしつけたら21時を回っていた。

とてもじゃないけど、眠れない。

理由は簡単だ。

「お茶、入ったよ？」

そう声をかけてくれたのは、水瀬君。

何故か私、水瀬君と相部屋だったんだもん！

さっき、誰かが入ったと思ったらそれは水瀬君。

男の子と同じ部屋なんて何かあったらどうするの！？

葉子もいるのに！

……一瞬、葉子をルシフェルさんに預けちゃおうかと悪魔が囁いた。

ダメダメ！

よ、葉子が邪魔だなんて、そんなことない！

多分、ないんだから！

連れてきたこと失敗したなんて後悔してない！

してないんだから！

とりあえず、葉子を起こさないように二人ともベランダに移動。

真っ暗な海と星空しかない窓辺。

あーっ！

緊張するっ！

普段なら教室とかいろんなところにいるのに、何でこんな時はこ
うも緊張するんだらう。

二人きりになったことはたくさんあるのに。

何か言わなくちゃいけないのに言葉が出てこない。

お茶を飲んでも喉が渴いてくる。

頭の中では、水瀬君とこれからナニをするのか。

まさかこんなことになるとは思ってなかったから下着は普通のだし……。

避妊ってどうやればいいんだろう？

水瀬君、ちゃんとリードしてくれるかなあ。

本当、ヘンだと思うけど、そんな心配ばかり浮かんでくる。

心配？

違う。

期待だ。

私は今、期待している。

何を？

水瀬君に抱いてもらえるかもしれない。

そう、期待している。

罪悪感はない。

水瀬君が日菜子殿下とつき合っていることは知っている。

だけど、私と殿下ははっきりライバルだと互いに言い切った間だ。ライバルだから、この先、私が水瀬君と何しても文句は言わせない。

肩書きは関係ないって言い切ったのは向こうなんだから！

「ねえ……水瀬君」

そう思うと、やっと言葉が出てきた。

「えっ？」

「日菜子殿下とこの前……こうして同じ部屋だったんでしょう？」

「違うよ？」

「うそ」

「あの時は、殿下と橘さんって女官の人が一緒だったんだよ？僕は別室」

「本当？」

随分疑わしい顔してたと思うけど、それで普通だとも思う。

「本当だよ……」

水瀬君は困ったような顔をした。

「殿下と二人つきりなんてよっぽどのがないと……本当に貴重な時間なんだから」

「……水瀬君は」

言葉はひっこめられない。

「殿下のこと、好きなの？」

「……うん」

「瀬戸さんより？」

「……多分。でも、わかんない」

「わかんない？」

「殿下だけを好きになっていいのか……よくわかんない」

「浮気性なんだ」

「そうじゃないよ」

「そう聞こえる」

「……昔、ううん？本当は今でも誰より好き。愛しているって、その人だけには言い切れる。僕にもそういう人はいるんだ」
愛している。

そう言い切れる人が水瀬君にはいる。

それは、初めて聞いた。

「だけど……」

水瀬君の表情が曇った。

「僕はその人と別れる……別れなくちゃいけなくなった。死ぬほど辛かった。死んじゃいたいって初めて本気で思っただけ」

「……」

「綾乃ちゃんの時もそう。綾乃ちゃんが嫌いなんじゃない。好き……だと思う。だけど」

聞きたくない。

そう思っても、言葉にはしなかった。

水瀬君は精一杯の勇気を出している。

それがわかる。

なら、それに精一杯答えるのは最低限度の礼儀だ。

「殿下まで……いつか同じ思いをするのかなって思ったら……好きにならない方がいいのかなって……そう思って……怖いんだ」

「それでも」

「？」

「殿下は精一杯、水瀬君のこと想ってる。それには答えてあげなくちゃ」

「……うん」

「納得いかない？」

「ううん？」

「殿下のこと、嫌い？」

「……好き」

「あのね？水瀬君」

私は水瀬君にお茶をいれてあげながら言った。

「そりゃ、どんなに愛し合っていても、いつかは別れる。……死ぬから」

「……」

「でも、それを恐れていたなら何も出来ないし、愛し合えない。価値無いよ。そんなの。刹那の快樂に身をやつせといってるわけじゃないけど、その時その時の互いの想いを大切にすることの方が大切な

んじゃない？」

「そういうもの？」

「あの時告白しておけば！なんて後悔する方が絶対にみっともないもん。そんなことしちゃダメだよ？」

「そうなの？」

「一番悲しい思いをするのは、好きになった女の子の方なんだから——女の子に恥を掻かせちゃダメ！」

「……そうなんだ」

そしたら水瀬君、とんでもない言い出した。

「そこまでのうからには——桜井さんにも、好きな人、いるんだ」「えっ！？」

な、何聞いてくるの！？

「いるんじゃないの？」

め、目の前にいるよ！

この鈍感！

あーっ！もうっ！

……私、何やってるんだろう。

いつまでピエロやってれば気が済むんだろう。

一番好きな人に、別な女の子をけしかけるなんて！

……こんな惨めな話、ないよ。

コンコン

ドアがノックされたのは丁度、私が時計を見た時だ。
時間はもういつの間にか22時丁度。

ドアの向こうにいたのはルシフェルさんだった。

鈴紀さんがいないという。

「どこかで悪巧みでもしてるんじゃないのか？」

合流した羽山君はそう言うけど、どうしたものか。

「下手に動かない方がいい」

水瀬君はそう言う。

「この暗闇で下手に動けば余計な犠牲が出ないとも限らないから」
……そうね。

私達は、夜明けを待つて——とりあえず寝た。

目が覚めたのは5時。

目が覚めたら、水瀬君と葉子と私で川の字になって寝ていた。
夫婦じゃあるまいし。

そう思っても、なんだかそれだけで嬉しかった。

葉子が私の子供で、水瀬君が旦那様。

目が覚めた妻はとりあえず朝ご飯とお弁当作り。

……本気でお料理、お母さんから教わろうかな。

とりあえず、思考を現実に戻した。

考えが深くなればなるだけ、自分が恥ずかしくてたまらない。

外に出ようとドアを開けた。

早朝なだけに人影はない。

そう思ったら——

「あらっ？」

廊下を歩いてくるのは――

「鈴紀先輩！」

「あら。桜井さん」

「あらじゃないです！」

私は鈴木先輩に駆け寄った。

「一晩中、どこにいたんてすか!？」

「うーん……」

先輩、なんだか言いづらそう。

「内緒」

「内緒じゃなくて！」

「女の子の事情……そうしていただけません？」

私は憮然として廊下を歩いていた。

ヒドイ話だ！

こんな所にひっぱりだして一晩中心配させて！

どこをどう歩いたんだろう。

丁度、廊下の角で人にぶつかりそうになった。

理沙さんだ。

しかも、横にいる男の人は。

「理沙さんと岩田警部？」

二人とも、ものすごく気まずいって顔してる。

そんなに気にする必要もないのに。

「お、おはよう」

「や、やあ」

「――早朝のトレーニングか何かですか？」

「ま、まあ、そういう所」

「そうですか」

この程度でいいはずだ。

「それにしても」

私は何故ここに来たか何となくわかってしまった。

この匂いだ。

とても美味しそうな匂い。

それにつられてふらふらと歩いて来たに違いない。

女の子としてなんだか情けない気がするけど、しかたないじゃない！

通路の向こう側が調理室らしい。

ちょっとマズいかと思ったけど、理沙さんもしきりに調理室を気にしているから、さそって見た。

「どんなお料理か興味有あませんか？」

「村田はこの匂いにつられてここまで来たんだ」

「警部！」

調理室に人影はなかった。

ただ、大きな寸胴がグツグツと音を立てるだけ。

「へえ？ ビーフシチューかしら？」

理沙さんが興味深そうに寸胴へ近づいていく。

「珍しいな」

岩田警部は入り口で調理場をのぞきながら首を傾げた。

「普通なら、仕込みだのなんだの、このくらいの時間なら大騒ぎなのに」

「朝ご飯、出るんですよね？」

「バイキングと聞いているが——おい村田」

まるでその声がきっかけだったように、理沙さんがその場に倒れた。

「理沙っ！」

岩田警部が慌てて駆け寄る。

床は水浸しだ。理沙さんの服が濡れていく。

「しっかりしろっ！」

うわーっ！

岩田警部、女の顔を平手でそんなに殴らなくても！
何か手伝えることがあると思って、私も二人に近づいて――
見ちゃった。

見たくないけど、見ちゃった。

寸胴の中身。

理沙さんじゃなくてもこれは卒倒したくなる。

寸胴の中で煮え立っているのは、確かにビーフシチュー。

問題は、その具。

人間の頭部。

少し縮れた髪がソースでべったりと額に張り付いている。

うつろに開かれた目と視線が重なってしまった。

「い……岩田警部」

声が出たのが救いだ。

「どうした？」

警部は、寸胴の中身を確かめると、すぐに理沙さんをその場に放り出し（コンクリートの床にたたきつけ、の間違いかも）、調理場を後にした。

さっきまでの美味しそうな匂いが、吐き気のする悪臭にさえ感じられる。

私はトイレに駆け込んで思いつきり吐いた。

「美奈子ちゃん？」

ルシフェルさんと鈴紀先輩、そして涼子さんがトイレに入ってきた。

「駆け込む所、見えたから」

そう言って、トイレではき続ける私を見た三人の顔が凍り付いた。うまく説明できない。

「というか、すぐに忘れない！」

「み……美奈子ちゃん？」

ぐいっ。

ルシフェルさんが真剣な顔で私の肩を掴んだ。

「相手……水瀬君だよな？」

へっ？

「心配なら、産婦人科……付き添ってあげるわよ？」

「私、妊娠検査薬持ってるから！」

あの……涼子さん？

「あの子……意外と鬼畜だったんですね」

何の話ですか？鈴紀先輩？

「みんなで朝風呂って思ったんですけど、これは意外なモノをですから……。」

「で？何ヶ月？」

何の話ですか？

「妊娠……してるんでしょう？あの水瀬君の子を」

「ち、違いますっ！」

私は自分の吐いたモノの匂いのせいで、こみ上げてくる吐き気を押さえられない。

胃液も出ない中、ルシフェルさんが背中をさすってくれた。

「飲み過ぎてわけでもないでしょう？どうしたの？」

もう調理場は大騒ぎだ。

旅館の関係者が悲鳴を上げて逃げ出している。

鈴木先輩、その中に割り込んで、しばらくして出てきた。

「アレ、見たのですね？」

私は無言で頷いた。

「そりゃ辛いでしょうよ」

妊娠なら面白かったのにつて、鈴紀先輩、とんでもないことばや
くし。

「火を止めろ！」

「現場の保存は！？」

「その前に証拠が骨だけになっちまうだろうが！」

理沙さんが何とか復活したらしい。

岩田警部に怒鳴られている。

「ああ——あの二人も来ているんですね？」

「お知り合いですか？」

「ええ……いろいろと」

地元警察から鑑識だの何だのが来る中、私達は岩田警部と鑑識の
人が話しているのを立ち聞き——というか、盗み聞きした。

「死亡推定時刻は……煮られているので正確にはわかりません」

「成る程？」

「詳しくは司法解剖にまわしてから……つてことですが」

鑑識の人は言った。

「あれじゃナイフとフォークで解剖した方が」

「俺はそういうの嫌いなんだよ」

岩田警部、さすがに常識人です。

それにしても……。

私は考えた。

何か引つかかる。

おかしい。

うーん。

何だろう？

「あーっ！お姉ちゃん！」

葉子の声に我に返った。

パジャマ姿の葉子がこっちに駆けてくる。

「起きたのにほったらかしにしたっ！」

「――困るな」

背後で岩田警部が苦い顔をしていた。

「警察の情報は、外部の人間には知られたくないこともあるんだぞ？」

「す、すみませんっ！」

謝る私だけど、鈴紀先輩は涼しい顔だ。

知り合いつてのは本当らしい。

岩田警部は苦い顔をしかめて言った。

「その前に腹ごしらえだ――食べたかないかもしれないが、そのお嬢ちゃんはお腹空いているだろう？」

食事はレストランに集まって行われた。

もう騒ぎは知れ渡っているのかもしれない。

旅館側が誠意とでもいいたいんだろうか、それとも元からか、客前でローストビーフの切り分けを行っていた。

あまり食欲がわかない中、無理矢理胃袋に押し込む。

みんなそろっての食事なのに、なんだかお葬式みたいな沈んだ顔ばかり。

「虹男の仕業ではありません」

鈴紀先輩はぽつりとそう言った。

「虹男は、美食家でもありますから……」

「逆に」

葉子にローストビーフのサンドイッチを作ってあげていた水瀬君が言った。

「だからじゃない？」

「どうということ？」

それは興味ある。

「ほら。美食の果てに行き着くのは——アレともいうし」

「寸胴の中身、見てきなさいよ」

「どさくさ紛れに見ては来たよ——先輩」

「はい？」

「犠牲者には心当たりがあるんですね？」

「……」

パンをちぎっていた鈴紀先輩の手が止まった。

「虹男から、彼を守ること……そのために来たのですが」

「どうして、それを言わなかったんですか？」

「生徒に知られるとマズいのです」

マズい？

……。

そういうことか。

「探偵部の裏切り者を身内で確保したかった——そういうことで
すか？」

「そうです。桜井さん、さすがですね」

「虹男からの誘い——あれが殺人予告だと知ったあなたじゃない
んですか？ 岩田警部達を呼び寄せたのは」

「……あのクーポン券は君か」

鈴紀先輩は頷いた。

「万一の際の無罪証明にもなりますから」

「いるだけで犯罪者って気がするが」

「光信、黙りなさい」

「でも」気になる。

「誰なんですか？」

「鍋の中、顔でわかりましたよ……昨晚、私達の監視下から行方をくらませた浅里信夫」

「誰？」

「元探偵部部員……部費を横領した挙げ句、機密を盗み出し、それを元に某アイドルを強請っていたのです」

「詳しく聞きたいな」

「岩田警部。後でお話ししますが、今は桜井さんとお話しさせてください」

「私？」

「美奈子さん？」

鈴紀先輩はぞくつとするほど綺麗な顔で微笑んだ。

「何か、気になることがあるんですか？」

「……はい」

そう。

あるんだ。

「虹男って——先輩の知り合いじゃないんですか？」

「私も正体を確かめてはいません」

「じゃ、その虹男に任せましょう」

そう。

それでいいんだ。

「何故ですか？」

「虹男って、仕事はいい加減な方ですか？」

「いいえ？むしろ、仕事は芸術的。猟奇的とはいえ、警察官も感心するくらい」

鈴紀先輩、なんだかうっとりした声になった。

「そうですか——嬉しそうですね」

「それはもう」

うわっ。頬を赤らめてまあ。

「あの小学校の入学式の時、25口径を3発撃ち込んで以来、私の終生のライバルと心に決めた方ですから♪」

「どういう心の決め方かは聞きませんがね……つまり、仕事にプライドを持っている人なんですね？」

「それは間違いないでしょう。明光学園の敵となる愚か者のみを狙い、確実に、芸術として仕事を成す方」

「それが——もし、仕事の結果を汚されたら、どうなります？」

「ぼかん。とした鈴紀先輩。意味がわかったんだろう、青くなった。黙っては——いないでしょうね」

「ええ——ですから、私達が捕まえるのは別です」

こほん。

私はわざと大声で言った。

「あの寸胴の中身見たけど、ヒドイものね。あれが料理人の仕事だって言うなら生ゴミが高級食材になるわ？アクも不十分どころの話じゃないし、煮汁だってヒドイ色してたし、料理のプロの仕事っていうなら信じられない！」

さて——乗ってくるかしら？

「なんだとっ!？」

ローストビーフを捌いていたコックが突然怒鳴ると、包丁片手に私の所に近づいてくる。

「口先ばかりで作ったこともねえヤツが何を偉そうにいつてやがるっ!あるだけの食材でも料理にしてやるのがプロってもんだ!」

中年の坂はすぎているだろう。

頑固一徹って感じのコックが私に掴みかかろうとして——

「はっ、離せっ!」

羽山君と秋篠君に取り押さえられた。

いくら暴れてもムダ。

相手は騎士なんだから。

「さて」

私は立ち上がってコックに尋ねた。

「寸胴って——どこの寸胴のことですか？」

「こ、殺したのは俺じゃねえ！俺はただ、人間を料理してみたかっただけで！なあ！それが罪だっていうのか！？」

手錠をかけられたコックが警官に引きずらながら叫ぶ声が聞こえてくる。

私達は無言で遠ざかるパトカーを旅館の窓から見送った。

「それにしても」

博雅君が驚いたように言った。

「犯人が料理人だって、よく気づいたな」

「直接的な犯人は——虹男だと思う」

私は葉子の手を握りながら言った。

「あのコックは多分……死体の第一発見者に過ぎなかった。場所はあの調理室。水で濡れていたのは血痕を隠すため。やったのはあのコック。理由？死体を見て魔が差したんでしょう？滅多に手に入れない人間の死体。それが食材に見えて——ああやつちやった」

「質問の答えになってないよ？」

水瀬君は興味津々という顔だ。

「どうしてコックだって思ったの？」

「教えてくれたのは水瀬君だよ？」

「僕？」

「そう。この前、肉料理作ってくれたでしょう？中は10時間近く煮たっていうのに全然煮くずれしてなかった」

「……ああ、あれ。あれが？」

「思い出したくないけどね？よくよく考えてみると、鍋の中で煮ら

れたにしては外見がはつきり保たれすぎている——知ってる？首狩族ってね、長時間鍋に首を入れて頭蓋骨抜くのよ？」

「つまり、クタクタになっていない。そこにひっかった」

「ただ鍋に入れるなんて、猟奇殺人としてもデキが悪すぎる。だから思ったの。これは料理されたんだって」

「原型を保つ調理がされていた？」羽山君が首を傾げる。

「そう。あらかじめ焼いてあったのよ」

「そういえば」

鈴紀先輩も思いだしたことがあるらしい。

「頭髮が縮れていました」

「どういう焼き方したか想像したくないけどね。多分、そういうことでしょう」

「俺……しばらく肉食えねえ」

「同感」

とはいえ、お腹空いたな。

葉子も何だか空腹って顔だ。

「虹男の狙いがこれだったのかどうかは知らないけど——あとは彼に任せればいいのよ」

「後を——任せる？」

「虹男が、もう一人殺します」

「誰を！？」

涼子さんの興味津々という声に居合わせた全員の視線が私に集まるけど……

「決まってるでしょう？」

としか言い様がない。

「あのコックよ」

それに、問題はそこじゃない。

「それより鈴紀先輩？」

「はい？」

「虹男の挑戦っていうか、お誘いはこれで終わりでしょうか？」

「いえ？」

鈴紀先輩はあっさりと否定してくれた。

「むしろ彼にとって予定外の出来事です。仕事を台無しにされ、プライドを傷つけられた彼は、新たな事件を用意して、私達の前に現れるのは当然です」

その時、初めて私は鈴紀先輩がケガをしているのに気づいた。

「先輩、指、どうされたんです？」

「昨晚、転びました」

そっと絆創膏をまいた指を隠す鈴紀先輩。

「はぁ……」

「でもご安心下さい！」

鈴紀先輩、なぜか励ますような口調で言った。

「相手は腕に手傷を負わせましたから！」

「虹男とやりあったんですか！？」

「もちろん♪激しい銃撃戦でしたわぁ」

うっとりどころか、自分の世界に旅立った鈴紀先輩。

「……ねえ、羽山君」水瀬君が横にいた羽山君の袖をひっぱった。

「何だ？」

「鈴紀先輩って」

「ああ」

羽山君は盛大にため息をついた。

「基本がトリガーハッピー女だ」

「……納得」

私達はそれからもう一泊して別な事件にぶつかることになる。
結果だけ記録しておこう。

パトカーに乗せられたコックは惨殺死体となって近くの海で見つかった。

パトカーに乗っていた警察官4名の内、3名が近くで見えられたパトカーの中で縛り上げられ、1名が行方不明になっている。警察はこの1人が犯人の変装であるとして行方を追っているが、手がかりはようとして掴めない。

学校に戻った私は、これを記事にして部長に提出したが、

「な、なんで却下なんですか!？」

「考えてみてご覧? 桜井君」

西園寺部長は記事の書かれたレポートを机の上に置いた。

「ゲシュタポを敵に回すつもりかい？」

「そ、そんなつもりは」

「鈴紀にそう思われたらアウトだよ？」

「鈴紀? ……部長、ご存じなんですか？」

「ああ……小学校以来の腐れ縁だね」

「親同士の決めた婚約者とか？」

「むう……」

あれ? 当てずっぽうだったのに。なんで部長、そんな厳しい顔に?

「桜井君」

「はい？」

うわっ。私、地雷踏んだ?

「誰から聞いた? それ」

「はい？」

「私が、鈴紀と婚約者同士の間柄だと」

「ええっ!？」

私、よっぽど大きい声出したらしい。

「鈴紀先輩が部長の婚約者あつ!？」

次の瞬間。

部長室のドアが破られ、部長に思いを寄せている部員達がなだれ込んできた。

「部長、どういことですか!？」

「先輩!これはスクープですっ!」

「輪転機止めてっ!これ流して先輩達の関係滅茶苦茶にしてやるっ!」

「あのお……」

大騒ぎとなる中、私はふと、頭を抱える部長の右腕に違和感を覚えた。

「部長?」

「ん?」

「右腕の包帯……どうされたんです?」

「ああ……夜道で転んだんだ」

「へえ?」

その後、どうやら私は鈴紀先輩を敵に回したらしい。

鈴紀先輩、部長との関係を隠していたようで、それをばらすきっかけを私が作ったと見なされたのだ。

そして、校内の掲示板に貼り付けられたのは――

「本当に……間違いはなかったんですね?」

校長先生にこう問いただされたのはこれで何回目だろう。

「デートの回数も含めて、間違いがないといわれても疑わしいんです」

「はあ……」

校長先生の手元にあるのは、一枚の写真。

あの旅館の部屋で川の字になって眠る私と葉子、そして水瀬君の写真。

「本当に、間違いなく、ただ仲良く眠っていたのですか?」

「妹の横で間違いを犯すほど、私は物好きではありません」

「そうですか……」

校長先生は安堵のため息を漏らした。

「桜井さん？あなたは学業優秀、品行方正をもって先生達の評価も高く、一流大学への推薦枠もこのままなら問題なく獲得できる優等生なのです」

「はぁ……」

そうだったんだ。

初めて知った。

「その生徒が、こんな写真をばらまかれては困ります」

「私も困ってます」

「……素行には十分注意するように」

「はい」

「では下がっていいです——教頭」

「はっ」

「瀬戸綾乃さんがクラスメートをまたまたまた、半殺しにしたというのは本当ですか？」

校長先生と教頭先生のやりとりを背中受けて流しつつ、私は校長室のドアを出た。

「はぁ……」

私は思う。

いっそ、校長先生に言ってやればよかった。

あの晩、私は水瀬君に抱かれました。

葉子は私の子供です。

そう言ってみれば良かった。

どうなったんだろう？

言いさえすれば、私は水瀬君ともっと近づけたんだろうか？

あの写真をばらまかれて、私の周囲は、私と水瀬君がどういう関係だと思ったんだろう？

あの写真が「当たり前」って思われた？

ありえない。

そう思われるには、私達は遠すぎる。

でも、近づきたい。

そばにいたい。

どうやったら、もっともっと水瀬君と近づけるんだろう？

わからない。

わからないことばかりだ。

はあっ……。

ため息混じりに歩き始めた私。

その腕を強引に掴んで引きずり始めたのは――――

「す、鈴紀先輩!？」

「またやられました!」

「なっ!？」

私は何とか鈴紀先輩から腕を離した。

「あ、あんな写真をバラまいて!何ですか!？」

「あれは私の仕業ではありませんっ!」

鈴紀先輩?それを信じろと?

「虹男の仕業ですっ!」

「虹男が?」

「また予告状が届きました!」

「わ、私もうイヤですっ!」

「今度こそオールヌードをばらまかれますか!？」

「もうあの写真だけでこりこりですっ!」

泣きたい!

もう泣く!

泣いてやるっ!

「虹男、あなたを敵に回したようです!」

「私が虹男の敵!？」

「相当、心証を損ねたんじゃないですか?何したか知りませんが」

「心当たりがありませんっ!」

「とりあえず、次は旧校舎ですっ!——はりきって逝きましょう
!」

「字が違う!字が違いすぎるうううっ!」

旧校舎で何があったか?

それはまた別の話と言うことで……。

鈴紀編（後書き）

やっぱり……推理モノは無理がありますね。私の技術では。未熟さ
実感です。

推敲が足りないんですね。

たった4時間ちよいで勢いだけで書いたもんだから……大反省！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3549c/>

安楽椅子に寝そべって

2010年10月8日15時55分発行